分け与えられた勝海舟と咸臨丸資料 上

片桐一男

歴史上の人物の扱いには波があり、偶然の好機が重なって、注目される場合もあるようだ。勝海舟も咸臨丸とともに例外ではない。

テレビドラマでおなじみ、ということで、うちの土蔵の桐ダンスのなかに、もしや、あったのではあるまいか。というようなことがきっかけで、資料が長い眠りから覚めたことがあった。

いま筆者の手もとには、昭和49年10月5日付の「読売新聞(新潟版)」の切抜きがある。

「海舟ゆかりの文献続々」と大きな横断の見出し。「皆伝書や咸臨丸の図面」「糸魚川の清水さん〝お役に立てば公開〟」などという見出しの文字が躍っている。

与板町の長谷川一夫兄がこの報を知らせて下さった。紹介文のなかに「トイクルスコロック説の訳文」の一語に心惹かれて、糸魚川訪問の機を得た。帰省を兼ねて三島町に帰った筆者を長谷川兄が車で連れていって下さった。昭和49年11月3日のことである。

確かに「トイクルスコロック説の訳文」小紙はあった。海外情報を示す紙片、横文字の紙片など、興味深く、貴重なものと拝見した。トイクルスコロックとはduikersklockと書くオランダ語(潜水器)。その時点で、筆者が年来関心を寄せていた一器である。

寛政十年(一七九八)、帰帆するオランダ商館のエライザ号が、長崎港口で暴風雨に遭い、坐礁、沈船となった。チャーターしたアメリカ船だったから引き揚げなければならない。輸出銅と樟脳を満載の沈船を引き揚げることは、化学反応のこともあって難航した。(詳しくは拙著『開かれた鎖国』講談社現代新書の第四章紅毛沈船引き揚げ事件、参照)この事件がきっかけで求められたのが、海中でも作業の出来る潜水器具。丸型の絵図まで付けた、再度にわたる将軍家の特注。

天保五年(一八三四)の夏、ようやくオランダ船が舶載してくれた。角型のダイケルスクロックだった。保存・伝来の変遷はあるが、「泳氣鐘」と名付けられ、現在、長崎は三菱重工業長崎造船所史料館の入口に、ドーンと飾ってある。

さて、清水家で貴重な資料をあまり熱心に二人で観ていたせいであろうか。最後に、当主の信さんが「こんなものもあるのですが、価値のあるものか、どうか、見て下さい、価値のないものなら処分しますから」といって、クシャクシャに丸まった反故類を出して見せられた。

お座敷に、ゆっくりひろげて、みる。薄い和紙に極細の墨線で描出された図面の二、三枚など。驚いたことに、船の総帆図ではないか。それも、咸臨丸のものとわかった。史上、有名な船にもかかわらず、咸臨丸は、万延元年、嵐の太平洋を楼断航行中の鈴藤勇次郎描く図しか知られていなかったから、ビックリ。後日、日本海事史学会で、石井謙治氏など専門家にも検討してもらった。同じ頃、オランダでも、ヤパン号(咸臨丸)の汽缶図が見付かり、画期的な年となった。

処分するどころの話ではなくなった。このようにして、清水家の資料81点が再発見された。信さんは、「預けますから、早く調査・研究をして、学会に発表して下さい」と、何度も要請された。貴重資料を長期に借りておくことは気が重い。また、不安でもある。そこで、取りあえず復写をとらせていただき、原文書類は一括返却申し上げた。

そもそも、どうして、こんな古文書類が糸魚川の清水家に、ひっそりと伝わっていたのか。

信さんの父君、道(ただし)さんは地元の糸魚川中学校に入学すると同時に、柔道をはじめた。当時、柏崎中学校の石黒敬七さんと柔道を通じて友だちでもあったという。その後、皇宮警察におり、大正初期の日本チャンピオンとして有名だった中島辰熊師範の助教となり、柔道を教えたが、徳川慶喜の十男で海舟の婿養子となった勝精さんに見込まれ、ボディーガード兼相手役として、当時の東京都港区氷川町四のお屋敷勤めとなった。越後出身の勝家は使用人を越後出身者に限っていたことも作用していたようだ。

その後、昭和の初期に、勝精さんが屋敷の約70%を氷川小学校の建設用地として東京都へ寄付することとなり、土蔵のとりこわしをした時、精さんにかわいがられていた道さんが文献・手紙などを精さんから贈られ、糸魚川の自宅に持ち帰った。

その当時は文書の詳しい内容を調べることもなく、数年後、仕事で東京に出かけた道さんが、デパートで「勝海舟展」を開いているのを見かけ、

「自宅にも勝海舟の書があったのではないか」と思い出して、調べ、勝海舟の書などがあることを確認していたらしい。しかし、そのことを公表せず、そのままにしていたため、一般には知られることもなかった。信さんが、先代道さんと似たような経験をして、前記の新聞報道に至った、ということのようだ。

筆者の清水家資料の調査はどうなったか。ひとしきり、文書類の解読と調査、英語とオランダ語文書の翻訳に没頭した時期が続いた。しかし、本務校、青山学院大学における勤務が、年とともに多忙に打ち続き、学外の学界活動としては、日蘭交流400年事業等に関係したこともあって、成果発表は、すっかり延び延びになってしまった。この間、信さんもご逝去、ご当主も代がかわって久しい、と認識している。また、文書群は、一時、ハウステンボスの美術館との間で譲渡交渉のあったようであるが、その後のことは、またまた無沙汰続きになっている。

定年後、はやくも八年。身の廻りの雑事の片付けにかまけているうちに、このほど喜寿を超えてしまった。海舟・龍馬ブームの再来もあってか、幕末史研究会からのお声がかりで、ようやく、勝海舟・咸臨丸に再び手をつけてみたという次第。おそまきながら、本誌の余白を借りて81点の目録を報告、紙幅が許せば、注目の文書若干の紹介を試みておきたい、と思いたった。

勝海舟・咸臨丸関係清水家資料目録

1　咸臨丸総帆図　一組
2　蘭文書状（Ilowichiryより Kat〈勝〉宛）　一通
3　蘭文書状（Pompe van Meerdervoordより Cad〈勝〉宛）　一通
4　蘭文書状（C.J.Umbgroveより Cads Lintaro〈勝麟太郎〉宛）　一通
5　蘭文書状（H.O.Wickersより den Kommandant Katsan宛）　一通
6　蘭文書状（Van Troijenより Cad〈勝〉宛）　一通
7　蘭文文書　無署名
8　英文書状（Commandant office Navy Yard, Mare Island, March 29th, 1860, より Caht Lintaro〈勝麟太郎〉宛）（付・封筒）　一通
9　英文挨拶名刺　一枚
10　蘭文地球図　一枚
11　トイクルスコロック説　天保五年午七月（勝海舟筆カ）　一枚
12　初目録　天保十亥秋（伊東鹿之輔直方・嶋田虎之輔直親より勝麟太郎宛）　一通
13　後目録　天保十一子正月（伊東鹿之輔直方・嶋田虎之輔直親より勝麟太郎宛）　一通
14　地図（馬場先・桜田・坂下・内桜田・和田倉御門内）　一枚
15　地図（小石川村一橋邸・原町酒井邸）　一枚
16　地図（関宿切道・渡し）　一枚
17　地図（新坂往還・根岸往還辺）　一枚
18　書状（戸田采女正内　相羽辰之進・桑山豊三郎より浅羽神三十七軒）二月　一通
19　書状（足立唯一郎より勝安房宛）　九月十八日（付・封筒）　一通
20　書状（阿部潜より勝安房宛）　九月十三日（付・封筒）　一通
21　書状（荒木卓爾より海舟宛）　十一月廿六日　一通
22　書状（荒木）卓爾より海舟宛）　一通
23　書状（文通帳写）（九鬼より石川宛、六月二日、石川多宮より勝麟太郎宛、六月三日）　一通
24　書状（廻状）（石川多宮より築山文左衛門・勝麟太郎宛、九月六日、京極より石川宛、九月六日）　一通
25　書状（石川多宮より勝麟太郎宛、十月十六日）　一通
26　書状（石川多宮より勝麟太郎宛、十月廿七日）　一通
27　書状（石阪周造より勝安房宛、明治廿三年七月廿二日、付、封筒）　一通
28　書状（伊藤介一より勝海舟宛、六月廿八日、付、封筒）　一通
29　書状（巌本善治より海舟宛、十一月六日）　一通
30　書状（岡本直郎より勝安房宛、五月十八日、付、封筒）　一通
31　書状（海軍省当直より勝海軍卿宛〈写〉、七年六月十一日）　一通
32　書状（太政大臣三条実美より海軍省宛〈写〉、明治七年八月十三日）　一通
33　書状（太政大臣三条実美より海軍省宛〈写〉、明治七年八月十三日）　一通

34 書状（木村紅雲より勝海舟宛、十月二十六日）　一通

35 書状（文通帳写）（九鬼より石川宛、丑五月七日）　一通

36 書状（坂井右近将監政纐より勝麟太郎宛、九月二日）　一通

37 書状（左京より海舟宛、八月十六日）　一通

38 書状（佐橋好之丞より勝麟太郎宛、四月廿五日）　一通

39 書状（佐橋好之丞より（写）、十月十七日）　一通

40 書状（寿（庵ヵ）より勝宛、二月十四日）　一通

41 書状（高野佐三郎より勝安房宛、十月十四日、付、封筒）　一通

42 書状（瀧川讃岐守、大久保主膳正より勝安房守宛、九月十一日、付、包紙）　一通

43 書状（琢再行より勝宛、八月十四日）　一通

44 書状（立花鑑寛より勝安芳宛、十二月十八日、付、封筒）　一通

45 書状（多原桜門より勝宛、四月八日）　一通

46 書状（丹後守より房州宛、六月九日）　一通

47 書状（津田真道より勝海舟宛、十二月七日）　一通

48 書状（寺嶋外務卿より勝海軍卿宛、六月八日）　一通

49 書状（道字斉より勝顧問官宛、九月一日、付、枢密院用封筒）　一通

50 書状（戸田泰則より勝伯安房宛、六月四日、付、封筒）　一通

51 書状（橋尾保より勝安房宛、十二月廿一日、付、清國威海衛占領軍法官部よりの封筒）　一通

52 書状（原良慶より勝宛、十一月六日）　一通

53 書状（兵事陣頭より安芳宛、廿四日）　一通

54 書状（真木少将より勝大輔宛、二月十八日）　一通

55 書状（松平与左衛門より勝麟太郎宛、三月十七日）　一通

56 書状（松前七左衛門より勝麟太郎宛、八月十日）　一通

57 書状（楽巌寺業輝より勝宛、八月九日）　一通

58 書状（寄せ場一智より伯宛、二十日）　一通

59 書状（謙より海舟宛、一月十八日）　一通

60 書状（政より海舟宛、四月十八日）　一通

61 書状（善兵衛より海舟宛、十月六日）　一通

62 書状（石井練司宛、三月）　一通

63 覚　午十一月十二日、石川多宮　一通

64 覚、安政三辰六月　一通

65 覚、四月廿一日、長崎方役所印　一通

66 筧帯刀廻状写　一通

67 御達書写　八月八日　松平伊豫守　一通

68 請取申冬御切米之事　安政三辰年十月（写）大御番九鬼式部少輔組勝麟太郎より美濃部庄右衛門・三雲新左衛門宛　一通

69 請取申冬御切米之事　安政五午年月（写）大御番京極周防守組勝麟太郎より美濃部庄右衛門・三雲新左衛門宛）　一通

70 （請取）証　明治廿三年十二月十八日、津田仙より勝安房　一通

71 上　寅七月朔日、御軍艦奉行支配組頭御軍艦取調役組頭兼帯石川壮次郎　一通

72 別紙申上候書付　寅七月朔日　石川壮次郎　一通

73 御触書御廻状　正月廿九日（写）　一通

74 勝麟太郎内津田政右衛門より御使中宛　東照宮献詠　六月一日　一通

75 （氷川なる……）西台隠士七十一叟　一通

76 （建議　日清戦争ニ付）明治廿七年十月十九日　華族会館長伯爵東久世通禧宛　一通

77 葉書（薄氷子より勝海舟宛、一月十二日　一枚

78 （伯爵勝精告別式通知）（付、封筒）

79 昭和七年七月十二日（勝芳孝より清水道宛）一枚

80 （御郭外之分上屋敷認方）　一枚

81 （和歌　大江戸も……）　一枚

極札（足利尊氏、尊氏、足利直義、細川右京太夫政元、細川讃岐守成之入道道空、吉良若狭守、赤穂一件之吉央之父他、武者小路教光、金地院、渡辺宮内入道道巴、松平筑前守、木戸半介、堺かわや臨也）　つづく

（かたぎりかずお　青山学院大学名誉教授）

スポーツ古書専門店
野球・武道・格闘技等スポーツ関連書籍雑誌高価買取いたします！　お気軽にお問い合せください。
ビブリオ
http://bibl.jp
TEL 03-3295-6088
目録は、ホームページに在庫全点掲載しています。
ぜひご覧ください。

分け与えられた勝海舟と咸臨丸資料 中

片桐一男

▲「初目録」（清水家資料）

◀「トイクルスコロック説」（清水家資料）

糸魚川に帰る清水道さんに、勝精さんから分け与えられた資料の目ぼしいものを紹介してみよう。

1の「咸臨丸総帆図」は注目の資料であるが、本誌に図の掲載は難しい。『海の世界』第22巻第1号（昭和50年1月）の拙稿に譲る。

12の「初目録」と、13の「後目録」も注目の資料である。海舟が、生涯で一番やったことは剣術である、といっているにもかかわらず、平成11年、江戸東京博物館で開催された海舟関係最大の展覧会と思える『没後100年　勝海舟展』にも、気付かれず、展覧されなかった。『勝海舟全集』にも収載されたことはなかった。

直心影流の剣士島田虎之助から授与された免状であるが、戸田派一刀流など他流も加味されているものらしく、単に「当流」という表現がされている。全文の掲載に加えて、他流混入の要素についての考証も『日本歴史』第353号（1977・10）の拙稿「勝海舟の剣術目録」に概要を紹介しておいた。

11の「トイクルスコロック説」一紙は勝海舟の自筆による書写と思える。

寛政十年（1798）、オランダ商館の庸船エライザ号が、バタビアへの帰帆準備を終えて、十月十七日の夕暮れどき、長崎の神崎沖の一時停泊位置に船がかりしていたとき、突風から暴風にかわった風雨にあおられ、坐礁・浸水・沈船となってしまった。輸出銅と樟脳を満載した鉄張りの重い船だった。樟脳は水中で化学反応、厳寒の海で引き揚げ作業は難航、死者も出た。

防洲櫛ヶ浜（山口県周南市）出身の漁師・村井喜右衛門の工夫による大掛りの仕掛けと働きによって、ようやく引き揚げに成功、オランダ人も喜んだが、時の長崎奉行、幕府老中も安堵して表彰。顛末は「蛮喜和合楽」と題し、仕掛け図も入れて木版刷に仕立てられ、オランダまで鳴り響いた、と伝えられている。この刷物、オランダに今も遺っているだろうか。

この事件がきっかけで求められたのが、海中でも作業が出来る潜水器具。将軍家の特注扱いとなった。注文書には、ボイスの百科事典にみえる絵図が参照されたらしく、丸型の絵図付きで発注書がオランダ側に手交された。しかし、当時、オランダが置かれた世界情勢のためもあってか、なかなか輸入をみない。将軍家の発注は繰り返し行われた。

天保五年（1834）の夏、ようやくオランダ船ドルテナール号によって舶載をみた。角型の大きな重い器具。小さな和船にのせると転覆しそうで、安易に使えない将軍の輸入品。図や図面だけが、珍しがられて流布した。幕末、長崎海軍伝習で来日したオランダの技士ハルデスがちょっと使用しただけという。保存場所は転々としたらしいが、現在は、この器具、長崎飽の浦町にある三菱重工業の長崎造船所史料館入口に、「泳気鐘」という名が付けられて、ドーンと展示されている。

この潜水器具、オランダ語でduikersklockと書く。長崎の阿蘭陀通詞や蘭学者は「トイクルスコロック」と呼んだらしい。

そもそも、筆者は、「トイクルスコロック説の訳文」一紙を見たくて糸魚川の清水家を訪問したのである。一紙全文を正確に読んでおこう。

トイクルスコロック説

トイクルス、此に水練

ト譯し、コロック、此に鐘と訳す、此具は海底に入れ、如何なる弁益あるやと尋るに、是、専ら真珠・珊瑚等を探り求め、且諸々の珍物・宝器等の海底に沈没したるを尋求るの具也、また海中に城郭なとを築かんか為に、海底より礎を組あけ、石垣を造るに用ひて、其業ノ自在をなさしむる要具也、其外、種々の用をなす事、不可勝計、故に其大畧を記す而已

○此上面の周囲に、拾ヶ所の窓孔を設け、厚き玻璃を嵌め、晴明を得る為にす、其玻璃の寸、凡九寸五分、厚サ三寸五分ほと

○往昔製せし物ハ本邦の鐘の形の如く、円形にして、しかも、小ク漸々二人を入る、即、今舶来の物は、図の如く角形にして、若も広大なり、故に五人程も潜入さるる事を得、

此量目、凡七千二百斤、貫目に直し、千百五十二貫目余なり

○右コロックの上面の中央に一孔を設け、其孔に青銅にて螺旋に造りたる筒をねしはめ、其口より厚皮を以て造りたる樋管を施し、海中の浅深に随て、幾管も螺旋にて継合せ、海底に及ほす、尚、船の上よりハ、其樋管の上孔にリュクトポムプ（此に空氣を送る具と訳す）といへる器を施し、海底に釣下たるコロックの内に空氣を送り盈たしめ、海中にて其業を行ふ人に呼吸を助る也

○海上に浮めたる船に、図の如き円転仕事ての大材を定て、其上端に鉄の滑車を施し、右具を上下せしむるには、上下の滑車に綱を幾重も通し、鋏にて製作したる自鳴鐘に用るか如き形の物に其綱を巻、車を旋転して、大舶の鉄錨を揚卸か如き術をなして、コロックを上下なさしむ、如斯の法を以て取扱ときは、其業多力を費さす、纔に五六人の力を以て自在に其動作をなす事を得、其機のたくみの広大なる事、実に玄妙と云へき物歟

天保五年午七月

○水中に降す時、呼吸に合せて、降し、揚る時ハ、至て迅速也

○寒暖の氣、水中と水上と同しからされハ、コロック中の人困苦して、一時も水中の働き不成と云、依之、寒暖昇降を以て、水中、水外の氣を合する也、若空氣を入るに、過に及ある時は、忽文通を以て、寒暖の度に合す

○浅深を量り海底より一丈上に此コロックを釣置也、此測量に高低過不及ある時は、働かたしと云

○コロックの昇降の縄は、鯨の筋にチャンを引きかため、用たるものにて、万世不朽の品なり、水中に降て、コロック中に海水半入、其上は不入水、則、腰掛の辺迄いたると云

duiyrs krog. die in Water beweeging maakt.

このダイケルスクロックについて、正確で詳細な図がオランダの国立中央文書館と早稲田大学図書館にある。説明文も付いている。末尾に「天保五年午七日写之」とある。おそらく輸入当初、蘭人から受けた解説の内容をオランダ通詞が伝えたものと見受けられる。海舟の書写と思われる「トイクルスコロック説」の前段の文章は、漢字・仮名の使用法や語尾の違い、若干の省略を除いて、早大本と酷似している。日付も「天保五年午七日」と同一である。海舟が江戸で書写したものか、海軍伝習で長崎滞在中に書写したものか特定はできていない。早大本冒頭の空欄部分も海舟本で補える。良好な写本一紙ということになる。ハーグの「一件書類」によれば、舶載の角型ダイケルスクロックは英国ロンドン製と判明する。いずれ、オランダ本、早大本、海舟本の三本を比較検討の機を得たいものである。

64の「覚」は、勝海舟が、それまでの小十人組から大御番九鬼式部少輔組に栄進した際の書類で200石2人扶持になった。「安政三辰六月」付書類の写しである。栄進の理由は「蒸氣船運用其外伝習ニ付ては、昨年以来格別心配骨折候ニ付、追々成業も致すべき趣ニ相聞え候」というもの。第一次長崎海軍伝習における海舟の働きが、江戸の老中にまで聞えて、評価されたと読み取れる。

65の「覚」は次のようなものである。

覚

一金百五拾両

右は御軍艦練所教授方頭取勝麟太郎、長崎会所より弐百七拾六両拝借之内、書面之通、返納之分、慥ニ請取申候、以上

四月廿一日　長崎方役所 印

海舟が軍艦操練所頭取にな

ったのは文久二年（1862）七月四日のことである。その閏八月十七日には軍艦奉行並になっているから、この「四月廿一日」付書類は文久二年（1862）のものとわかる。黒印「長崎方」は珍しい。

「文政年間漫録」が示す一両＝一二八〇〇〇円で、海舟が借りた当初の金額を計算すると、三五、三二八、〇〇〇円となる。約三千五百万円である。海舟は頭取になった直後、このような大金を長崎会所から借りて、何に使用したのであろうか。すこぶる興味深い。解明されて欲しい新たな問題である。

48の書状は、六月八日付で、寺嶋外務卿から勝海軍卿に宛てたものである。文面は次の通り。

外国人内地旅行之儀ニ付、箇條書案差進置候処、本日英国公使より、尚別紙之通、規則再案差越候間、御返申候也

六月八日　寺嶋外務卿

勝海軍卿殿

海舟が参議兼海軍卿になったのは明治六年（1873）十月二十五日。寺島宗則が征韓論変後の新内閣に入り、参議兼外務卿になったのが明治六年のことである。同年の七月二十六日、各国公使が同文の書翰をもって、遊歩規定廃止、内地旅行許可の要求をし、九月二十七日に再び要求を行った。外務卿寺島宗則は明治七年六月四日、各国公使に外国人内地旅行規則私案を提示した。これに対する外国公使の反応を示す書状であることが判明する。したがって、本書状は明治七年六月八日付の一翰と判明する。このときの英国公使はパークスである。寺島外務卿から、外国人関係事情通の勝海軍卿に宛てられた興味深い一翰ということになる。

32と33の、太政大臣三条実美から海軍省に宛てられた二通の写も興味深い。次の通り。

32　海軍省

今般、米国大統領ヨリ献上候運転炮射的、明十四日浜離宮ニ於テ天覧被仰出候ニ付テハ、午後第三時ヨリ第五時マテ、通船停止候条、番船可差出、此旨相達候事

明治七年八月十三日　太政大臣三条実美

33　海軍省

今般、米国大統領ヨリ献上候運転炮射的、明十四日浜離宮ニ於テ天覧被仰出候条、此旨相達候事

但、炮兵士官二名、射的手下士官三名、為伝習可差出事

明治七年八月十三日　太政大臣三条実美

ここにみえる米国大統領は第18代U・S・グラントである。南北戦争中の北軍最高司令官、1868年、大統領選挙で共和党に推され、当選した。大統領任期終了後の1879年、世界旅行の途中、日本を訪れた。明治天皇に献上された運転炮とはどんなものか。どこかに遺存しているのだろうか。射的天覧の様子、写真はないだろうか。グラント将軍の日本訪問中の詳細な時系列的記録はあるのだろうか。

37の、左京から海舟宛の八月十六日付書状も、なかなか奥が深い。

昨日ハ御苦労千万、其節申上置候海軍服章壱巻、巻入差出申し候、本日可然奉願候、尤昨日も申上候通り、兵部殿ニも殊之外御急ニ付、是等御含ミ御引合所希候、昨日之模様ニ而ハ、教師来着ハまつ壱ヶ月程有之、着之上、教授之仕方ハ如何、我軍艦組ヲ引請、生徒ハ日本人に託し候事哉、或ハ両様引請ニ相成候哉、左候得ハ、生徒之人員減し候とも可ナリ歟、御含御引合可被成下候、頓首

八月十六日　左京

海舟兄

ここにみえる「兵部殿」とは、明治二年（1869）十一月二十三日に兵部大丞に任じ、翌年の六月に辞退辞職した大村益次郎を指すと思われる。勝海舟が、長崎海軍伝習で、時間表に従ったオランダ教官からの六科にわたる受講、およびスームビング号、ヤパン（咸臨丸）号上でのオランダ語による実技訓練を受けたことはよく知られている。受講時外、訓練時間外の余暇、オランダ教官や士官と交流、聴取したことを『蚊鳴餘言』と題する一篇にまとめている。順序不同で書き留められた122の小話から成りたっている。これの、解読・分析・分類・考察によって、はじめて判明したことは、海舟が海軍の建設と世界の中における新国家日本の進路、新国家のかたち、をいかに深く考えていたか、ということであった。詳しくは『洋学史研究』第29号（2012・4）掲載の拙稿に譲るが、殊に意を向けていたことの一つに新海軍の軍制があった。その一環として士官の位階・服章のことがあった。山科宮に仕え、明治帝に近侍した左京こと高崎正風と、徴兵制実施に尽力、陸軍の建設に働いた兵部大村益次郎に、海舟の知見が生かされていたことを示す書翰と読み取ることができる。注目の一翰である。

（かたぎりかずお　青山学院大学名誉教授）

つづく

分け与えられた勝海舟と咸臨丸資料 下

片桐一男

清水家資料のうち、蘭文、英文の文書を訳出・紹介してみよう。

4

勝麟太郎様　手渡し

尊敬すべき勝さん！

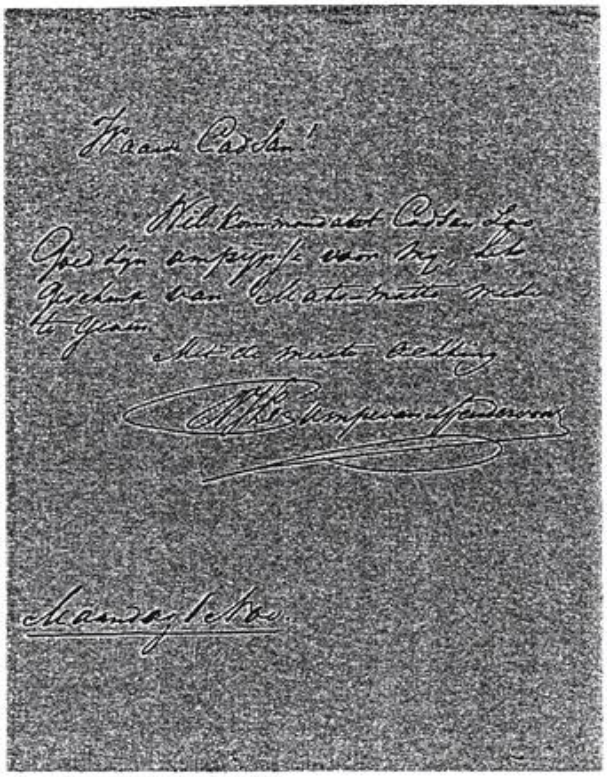
あなたに御迷惑をかけたくはないのですが、御差支なければ、次のような御願いをしてもいいですか。朝八時前に鞍つきの馬を貸して下さい。私はポンペ先生と一緒に茂木へ遠乗りをしたいのです。

私は直接頼むために、今日、二回おたずねしましたが、生憎御不在でした。

尊敬をこめて

C・J　アンブグローフ

文中にみえるポンペ先生は第二次長崎海軍伝習時に始まった医学伝習の教官として来日したオランダ軍医二等士官ポンペ・ファン・メーアデルフォールトである。経理部三等士官のアンブグローフがポンペと一緒に茂木半島の遠くまで馬で遠乗りをしようとしている。勝海舟から鞍つきの馬を借用したい、というのである。すると、ポンペは、すでに、馬を持っていたわけである。茂木半島の突端は、オランダ船が日本に定期の航路で接近してきたときに、最初に視界に入る地点である。「勝さん！」と呼びかけるオランダ語表記はCadzan!と記されていた。



3　ポンペ書状（清水家資料）

5

司令官勝さんへ　長崎

尊敬すべき勝さん！

ファン・トローイエンとポンペ先生と私とは、どういう船が近寄ってくるかを見るためにバルカス号で港外に出てみたいのです。それは許されておりましょうか。かつ、あなたもまた同行する氣はありませんか？　そうできれば、我々はとても嬉しく存じます。よき御返事を期待しつつ、いつものように私はあなたのお役にたつしもべであり、友情を込めて、

H・O・ウィツヘルス

月曜朝

取急ぎ

本翰も第二次長崎海軍伝習期間中二等尉官ウィツヘルスからの蘭文書翰である。来航船に対する臨検方法は、鎖国下の長崎では厳重なものであった。オランダ人がそのことをよく知っていた様子は、「それは許されておりましょうか」というような云い方から、よくわかる。伝習授業と艦上訓練以外の時間における、勝海舟とオランダ人教官たちの親交振りが具体的に察せられる一翰である。「勝さん！」との呼びかけは、Katsan!と表記されている。ことによったら「かっつあん！」と呼びかけ馴れていたのかもしれない。

3

勝閣下　長崎

尊敬すべき勝さん！

勝司令官殿、私のために松本からの贈物パイプ一本をどうか届けさせて下さいませんか。

尊敬を込めて

ポンペ・ファン・メーアデルフォールト

一〇月一日　月曜日

文中にみえる「松本」は、医学伝習における正式な唯一の門人松本良順のことである。長崎海軍伝習における医学伝習において、ポンペ、勝海舟、松本良順の関係を具体的に知りたい、と以前より思ってきた。短文で深い関係はわからない。しかし、親しい間柄の様子は伝わってくる。ポンペの講義を海舟・良順の両人が同席・受講の時間があったのではないか、と以前から察していたからである。Cadsan!とポンペも呼びかけている。やはり、「かつさん」であったか。「かっつあん」であったか。

7

無署名の蘭文書翰

シナとの條約が近々締結せられる

條約は、

イギリスに対しては、六大商業都市の開市と戦費の支払い。

フランスに対しては、牧師殺害に対する相当額の賠償。

宣教師に対する自由。

戦費の支払い。

ロシアに対しては、アムール川南面に到るまでシナに城塞設置の自由。

アメリカに対しては、南京川八〇〇マイルまでの貿易の自由。

すべての国に対してペキンに公使滞在を許す。

以上の平和條約は、情報によると、受入れられたのである。

6

勝麟太郎様

尊敬する勝さん！

シナと列強（国）との間に取り結ばれた條約について、何か知りたいでしょう。

御覧なさい（次の通りですよ）

平和が次の條件において結ばれたようだ。

シナは五大港を開くであろう、その一つは南京川から八〇〇マイル（英マイル）も離れたところにある。

広東はいろいろな條件の結末がつくまでイギリスとフランスの占領下におかれる。

シナはヨーロッパの商館がこうむった被害と海賊行為による損害とを賠償する。

シナは三年以内に戦費五、〇〇〇、〇〇〇ポンド支払いを遂行すべし。

各国公使がペキンに駐在すること。

全シナを通じて宣教師をゆるす。

シナの支出においてペキンにフランス最高司教の滞在を許すこと。

五港における自由貿易。

――――――

シナに大使をもつ英仏露米各列強はそれぞれの要求をし、そのことが他の諸国に対してもまた有効なさしめた。これら列強はそろそろここへやって来るでしょう。

ファン・トローイエン

6と7の両翰は、アヘン戦争の後、中国が天津において、ロシア、アメリカ、イギリス、フランスとむすんだ、総称「天津条約」の内容を速報した、なまなましい海外情報である。したがって、一八五八年安政五年、第二次長崎海軍伝習中の両翰である。

勝海舟が伝習の余暇、オランダ人教官から世界における強国の盛衰、戦争の勝敗、世界情勢の聴取に努め、海軍の創設、海軍士官の規律確立のための知識の集積に努めていた様子を、いままで顧みられることのなかった作品『蚊鳴餘言』の分析から知ったことであった。（『洋学史研究』第29号拙論「勝海舟と『蚊鳴餘言』」参照）一等尉官のファン・トローイエンが「知りたいでしょう」と海舟に呼びかける口振りから、ここでも、海舟が世界情勢の情報入手に強い欲求をもっていたことが確認できる。そんな矢先に聞かされた、中国が直面する現状と、「列強はそろそろここへやって来る」という衝撃的なニュースであった。勝海舟をして、いかなる決意を生じさせたことであったか。察するに、あまりある。

8

麟太郎艦長殿

日本蒸気艦咸臨丸上において

一八六〇年三月二九日R・B・カニンガム司令官が彼の友人にして日本海軍の麟太郎艦長に対する挨拶をこめて、かつ、艤装と運航についての図書『シート・アンカー』――それは銃砲や鎖・麻の錨鋼などについての有用な図表をも含んでいる――を贈呈させていただきます。

司令部

海軍造船所、メーア島

カリフォルニア

以上、勝精さんから清水道さんに分け与えられた81点の資料について、その目録と目

6　ファン・トローイエン書状（清水家資料）

不思議な符合
―編集長日誌から

樽見　博

古本を漁っていると資料どうしが不思議な符合をすることがある。当社のHP「編集長日誌」でも書いたのだが、誌面にも記録しておく。

先日買った大野林火『虚子秀句鑑賞』（角川新書・昭和34年）に川島つゆさんが尾形仂さんに宛てたハガキが挟まれていた。裏はタイプ印刷で、高木蒼梧老が長年書き溜めた俳人伝が明治書院から刊行されることになった。購入希望の場合は川島まで申し出て欲しい。その部数の代金を著者に送り、明治書院へは著者申し込みの形で注文する。本を入手したら川島宛代金を送金して欲しい。この分は印税から差し引かれるので、無意味のようだが、長年のご苦労を幾分でもお慰めしたいとある。これは昭和35年に刊行された『俳諧人名辞典』のことで消印も昭和35年2月1日である。この文面からすると、高木は生活に窮していたか、病床にでもある感じだが、昭和45年まで生きているし、この辞典は文部大臣賞を受賞、恐らく川島が後押ししたことも想像させる、そんな内容であった。一通のハガキにも様々な人生が反映するものだなと思っていたところ、その高木が昭和37年3月に神保町のY書店に宛てた返信の手紙を入手した。Y書店が高木に蔵書処分を持ちかけた件についての返信で実に便箋4枚にも及ぶ興味深い内容だ。先般、神保町のI書店が斎藤昌三から高木に蔵書処分の意向があると聞いてやってきたので、欲しいものを持って行きなさいといって35万円ほど売った。ところが、以前にM大学と譲渡の約束があったので研究用の書物をM大学へ30数万円売った。その他K書店にも稿本類を50点ほど売った。だからもうあまり大したものは残っていないが、高田蝶衣の一切の資料がある。これは貴店の近所の池上浩山人が数年前に調べに来たこともあり、出せば必ず彼が買うだろうという内容だ。『俳諧人名辞典』が文部大臣賞を受賞したことも書いてある。高木の手紙の中にも出てくるが、「業界未曾有の大規模な古書展」が計画され、盛んに買い入れ営業が進められていたのだ。反町さんが中心でやった文車の会主催の白木屋の即売展のことだ。十年ぶりの大規模なデパート展だった。

この高田蝶衣資料は、何回か前の日誌に書いたが、池上さん旧蔵書が市場に出品され、その中に蝶衣の俳句手控えなど一箱があった。貴重な資料と思い私も入札したが、まったく桁違いの金額で別の方が落札された。高木の言う通り池上さんが購入していたのだ。当時の30万円は現在の十倍以上だろう。とすればお金に困っていたとは思えぬが、この長い手紙からは、高木の金銭や物欲に淡白な性格が感じられる一方、大まかで鷹揚な高木の生活も見えてくる。故人だし、五十年近くも前の話だから、書いても失礼にはならない小さな「歴史」だろう。

偶然ではあるが、古本を漁っていると偶に起こる不思議な資料の符合である。

ぼしい若干の未刊文書の紹介をしてみた。

主として、勝海舟が長崎海軍伝習において講義の聴講と、艦上での実技訓練以外の余暇に、伝習のオランダ人教官と親交を深めて、海外知識、なまなましい世界情勢の情報入手に強い意欲を示していたことが読み取れた。殊にアヘン戦争後の「天津条約」をめぐる情報の入手は、その後の海舟の行動に思い当たる点が多く、いかに大きな衝撃をもって受け止められたか察せられる。

維新後、海舟が歴任した官職の在任期間のそれぞれの、立場と期間において、海舟が身につけた世界認識と知識が、頼りにされ、生かされる点の大きかったことか。読み取れて、注目の新資料群と判明した。

紙幅の都合で、割愛した資料の方が断然多い。いずれも、未刊・未紹介の新資料で、注目に値するものも少なくない。機会が許されるならば、再度、紹介・検討の紙幅を得たいものと思っている。

勝海舟と咸臨丸関係資料を考える場合、この清水家資料のような、点数も多く、史的意義の大きなものは、珍しい例かもしれない。しかし、上下にわたって交際範囲がひろく、かつ、求められれば、体験的記録・著作の写本を作って贈ったり、求められ、揮毫に応じたことの少なくなかった海舟であっただけに、まだまだ埋もれている資料がありそうである。これを機に、公開され、集成に努められることを望んでやまない。

生前の清水信氏のご厚意と、資料の保存に努めてこられた清水家の皆さんに、深甚の謝意を捧げたい。（二〇一二・三・三〇　記）

（かたぎりかずお　青山学院大学名誉教授）

スポーツ古書専門店
野球・武道・格闘技等スポーツ関連書籍雑誌高価買取いたします！　お気軽にお問い合せください。
ビブリオ
http://bibl.jp
TEL 03-3295-6088
目録は、ホームページに在庫全点掲載しています。
ぜひご覧ください。